東日本大震災における地域の再編過程と地域開発の磁場

---長期災害サイクルのなかでの＜住民生活を支える諸機能＞の再編---

○早稲田大学　浦野正樹
早稲田大学大学院　川副早央里
早稲田大学大学院　野坂真

1.　問題意識とその背景

東日本大震災においては、長期にわたる地域開発の歴史とそこでの志向性が、災害過程の様相に大きな刻印を及ぼしていることが明らかになりつつある。そして災害からの復旧・復興局面で起こっている事柄を、継起する災害に直面する地域の「長期にわたる災害サイクル」のなかで受け止めて論じる視点がとくに必要な段階に入りつつある。いまだ多くの被災地では、日常生活の拠点や生活を支える諸機能が仮設段階の状態で、地域生活を支える諸機能のあり方やその空間的配置についても、いまだ流動的な状態に留まり、広域的で大規模な地域的再編が進みつつある現段階で、その過程を上記の視点で見つめ直す試みは必要であろう。

2.　テーマの設定と研究フレーム

この一連の報告では、主として震災を経てダメージを受けた＜住民生活を支える諸機能＞がどのように紡ぎ直されていくのか、そのロジックとプロセスに焦点をあてながら、それが都市（マチ）という空間として再編成されていく過程を、長期にわたって形成されてきた地域の開発の歴史と関わらせて見ていくことにしたい。現在、被災地域では、人口の多くの部分が過渡的な状況に置かれており、その流動的で不安定な動きが広域な地域のゆくえを読みづらくしているが、＜住民生活を支える諸機能＞が紡ぎ直されていくさいのロジックとプロセスに焦点をあてることで、現段階で起こりつつある方向性とそこでの課題を、地域の「長期にわたる災害サイクル」のなかに位置付けていく可能性を見出したい。なお、ここで言う＜住民生活を支える諸機能＞は、現段階では不定形で流動的で暫定的な生活状況であることもあいまって、空間的に統御されたかたちでは顕在化していないケースが少なくないが、ごく図式的に単純化してカテゴライズすれば、①行政機能、②商業機能（比較的広域的な後背地全体のなかで、日常的な生活物資を調達することができる商業・流通等の機能集積）、③地域産業機能（地域の雇用を支える工業や地場産業などの機能集積）、④居住機能とそれを支えるコミュニティ機能、といった観点を念頭におきつつ、地域での空間利用の再編過程をみることは意義があろう。

これらの現在進行しつつある再編過程は、一方では地域での生活再建を可能にするために行われる住民各層のさまざまな生存戦略（試み）の集積である--これらは＜住民生活を支える諸機能＞を回復しつつ、それぞれの住民層やセクターの独自のプロセスとロジックを介しながら復旧・復興への道を歩もうとする試みである--とともに、他方では今回の災害の影響を受けて、一定の危険認知を踏まえたうえで何らかの安全性の担保を配慮に入れた今後の地域生活像を鋳造し直す試みでもある。災害の種類ごとに危険のあらわれ方が異なり、その受け止め方や社会的心理的なインパクトのあり様も異なる次元のものを内包するが、同時にこの違いは復旧・復興への歩みの過程やテンポに大きな差異を引き起こしており、＜住民生活を支える諸機能＞の再編過程に大きく左右しているのである。

また同時に、これらの再編過程は、継起する災害に対置する地域の「長期にわたる災害サイクル」のなかに位置付ければ、継起する災害ごとに起こるその後の再建過程のひとつのパターンとしてみることが出来よう。それは、次の災害に向けての脆弱性の水準を左右する大きな条件のひとつになっていくことになる。

本研究は、「災害以前から緊急避難、避難生活、仮設生活、復旧・復興を経て、次の継起する災害への予防へ」と循環する長期の減災サイクルをどのように構築し脆弱性を克服していくかを扱う「東日本大震災被災地域における減災サイクルの構築と脆弱性／復元＝回復力に関する研究」（科研費基盤研究Ｃ／研究代表　浦野正樹）の一環であるが、本報告では災害直後から復旧・復興へと向かう局面のなかで展開しつつある出来事を、＜住民生活を支える諸機能＞の再編成を軸にしてみていくことで、長期にわたって地域社会が経験してきた開発の歴史の中に位置付けて読み取っていく試みに焦点をあてている。